

IV-12

まちづくりに対する中心市街地周辺住民の意識分析

秋田大学 学生会員 ○中村 良枝

秋田大学 正会員 浜岡 秀勝

秋田大学 フェロー 清水浩志郎

1. はじめに

郊外の都市開発が次々と行われ、近年都市の顔ともいえる駅前や中心市街地の衰退が目立ってきている。郊外への大型ショッピングセンター出店等により、現状を上回る空洞化が生じる可能性がある。それを警戒するため、中心市街地に都市機能・魅力を取り戻す活動が始まるなど、地域住民の中心市街地活性化の意識は少しずつ高まりを見せている。本研究では、中心市街地周辺住民の商店街に対する現状を明らかにし、住民が求める機能・魅力について分析・考察していく。そこで生じる世代間の差異に注目しながら、活性化のための有効な対策について検討する。

2. 能代市の現状

現在の能代市中心商店街は、昭和35年の区画整理事業によって再編されたものである。昭和31年に起きた二度目の大火の後、防災的な目的も含め、道路幅が30mに拡幅された。そのころ商店街は大変な賑わいを見せていたが、時代の変遷とともにその賑わいに翳りが見えてきた。大型店の進出が盛んになり、中心市街地内の総合病院と高校が郊外へ移転するなど、中心市街地の空洞化が進行した。そのような中、まちづくり事業委員会が結成された。メンバーは能代市内各団体(自治会、NPO、婦人会、商店街連合会、市役所等)の代表者から構成されている。その中で実施されたワークショップ(以下WS)に参加したところ、特に商店街の代表者からは、商店街の駐車場・駐車帯といったハード整備を求める声が多く、また、アーケードの老朽化がすすみ、安全性の面から早急に対処したいという意見がでた。さらに商店街に行く用事がないなど商業的機能欠落、商店街への魅力の欠如などがあげられた。

3. 調査概要

WSで出た意見に、世代、職業的立場等による意見の違いを感じた。そこでWSで出された意見を参考に、商店街に求められているものを明らかにするために、アンケート調査を実施した。対象は中心市街地に住者や市街地内に勤務・通学しているものであり、それは

商店街が抱える潜在消費人口と考えられる。アンケート概要を表-1に示す。

表-1 アンケート概要

日時	H. 17.1.11~H. 17.1.20
配布先	市役所、総合福祉センター、 商工会議所、中心市街地内高校
調査内容	1. 回答者の属性について 2. 中心商店街の利用状況について 3. 関心レベルの評価
配布枚数	937部
回収枚数	688部 (回収率73%)

4. 商店街の利用状況と対策への関心レベル

中心商店街利用頻度を示したものが図-1である。就労者や学生は、ほぼ毎日中心地に通勤・通学しているにもかかわらず、利用頻度は低い割合を示している。

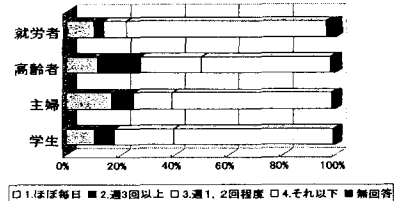


図-1 商店街利用頻度

本調査では様々な対策における関心レベルを調査した。その結果アーケードや駐車場といったハード整備に対する関心が高いことを確認した。若者向けの項目では世代間の違いが大きく表れ、高齢者はほとんど関心を示していない。

関心レベルで用いた項目を、表-2に示すA～Dの4つに分け、その中で重要と思う順に並べた。その結果を図-2に示す。学生は若者向け項目が多く含まれる「D.新規導入」に対する重要度が高く、高齢者・

表-2 関心レベル結果の考察

	概要	項目数	特徴
A. 商店街の空間について	建物・設備等のハード整備	8項目	・アーケードの有無に明らかな差。 ・駐車場・駐車帯に関して学生以外の関心が高い。
B. お店のサービス	現在のお店のサービス改善	6項目	・項目それぞれに対する優劣はあるが、その考え方は世代間でさほど差がない。
C. イベントについて	新しいアイデア・企画等により集客	4項目	・能代の特徴を生かした企画が高い。 ・新しいアイデアはあまり受け入れられない。
D. 新規導入	これまでの商店街に存在しなかった新しい施設・仕組みを導入	11項目	・ファーストフード・アミューズメントなど、若者向けの項目に対して世代間での差が大きく開いた。 ・各世代に対応した(必要な)設備に対しては各世代の関心は高いが、多世代の施設に関しては関心を示さない。

主婦世代ではアーケードや駐車場整備が含まれる「A. 商店街の空間」に対する重要度が高いことが示された。

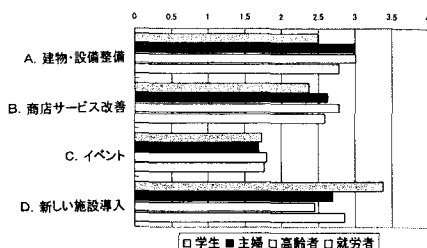


図-2 関心項目順位付け

5. 住民の類型化と特徴の抽出

対策項目に対する住民意識の違いについて数量化Ⅲ類を用いて明らかにする。数量化Ⅲ類によって求められた値を表-3に示す。1軸は「年齢」2軸は「関心レベルから見た世代によるバラつき度合い」3軸は「コミュニティ形成向け対策」4軸は「ハード・ソフト整備」と解釈した。2～4軸までの固有値に大きな差はない。その中で特に、住民類型が行いやすい1軸と4軸を用いて分析を行う。

表-3 数量化Ⅲ類の各数値

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.2319	9.50%	9.50%	0.4815
第2軸	0.1632	6.69%	16.19%	0.4040
第3軸	0.1480	6.06%	22.25%	0.3848
第4軸	0.1279	5.24%	27.49%	0.3576

図-3 をみるとカテゴリ配置の特徴からⅠ,Ⅱ,Ⅲのグループが見て取れる。グループⅠはアーケードや駐車場など建物・設備等のハード整備のカテゴリが布置している。グループⅡはイベント・商店のサービス改善等のカテゴリに加え、新規導入項目の中でも、特に若者に限定されないカテゴリが布置している。グループⅢは学生に支持が高く、世代によって関心レベルに差が出たカテゴリが布置している。

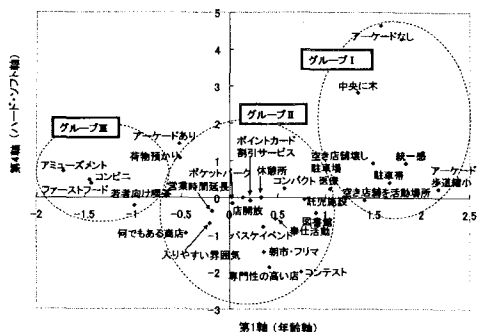


図-3 カテゴリプロット

1軸×4軸でサンプルをプロットしたものが図-4である。サンプルの配置から、学生が左側に、高齢者が右側に偏っているのが見て取れる。また、多くのサンプルが軸中央に集中していることもわかる(グループA)。

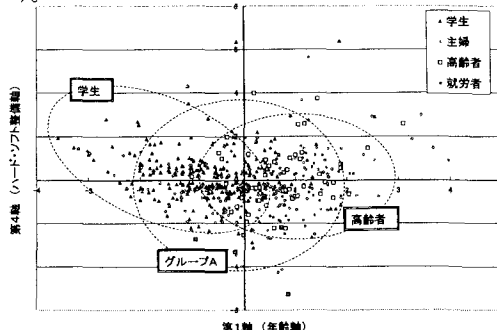


図-4 サンプルプロット

図-3、図-4の傾向を重ね合わせると、グループⅠは主に高齢世代から構成され、グループⅢは主に学生のような若い世代から構成されていることがわかる。グループⅡとグループAからグループⅡのカテゴリに対し、多くのサンプルが影響していることがわかる。

6. おわりに

本研究では中心商店街に対する意識を各世代に対して調査・分析した。その結果、市民意識の特性として、グループⅡ、グループAの双方から「イベントや商店のサービス改善等、ソフト面対策」、「新規導入の中でも若者に限定されない施設対策」に関心が高いことがあげられた。グループⅢには、学生だけではなく、就労者も多く分布していることから、コンビニやファーストフードといった、お昼休みや学校帰りに気軽に立ち寄れる飲食店等が通勤・通学している者に支持されるのではないだろうか。

今後の課題として、①今回得た世代間の差異が、どのような過程に基づいて発生するのか、それぞれの買い物や交通手段の特性などから検討、②高齢世代にハード整備の指示が高かった要因から、高齢化社会の中での商店街の在り方検討の可能性、等が考えられる。

《参考文献》

- 1) 能代市企画部企画政策課：能代市中心市街地活性化基本計画 2002.3
- 2) 能代市商工会議所、TMO 能代、畠町商店街、駅前商店街、中央商店会：畠町通り賑わい創出に関する構想書 2004.4
- 3) 森川稔：中心市街地活性化における市民活動団体の取り組みと課題に関する考察、第37回日本都市計画学会学術研究論文集、pp865-870、2002